

# 学童疎開

沖繩セントラル病院理事長で  
脳神経外科医の大仲良一さん  
(81)は毎年、8月になると自ら  
が「生かされた命」であったこ  
との意味を思い起す。

72年前の1944年8月14  
日、兼城国民学校3年生だった  
大仲さんに乗せた学童集団疎開  
船は那覇港を出発、熊本に疎開  
した。その1週間後の21日、集  
団疎開の学童を含む1788人  
を乗せた陸軍徴用貨物船「対馬  
丸」が那覇港を出港。長崎に向  
かう途中の22日夜、トカラ列島  
の悪石島から北西約115kmの海上  
で米潜水艦「ポフィン」の魚  
雷攻撃を受け、沈没した。乗船  
者の内1418人(氏名判明  
分)が犠牲になり、うち学童は  
775人に上った。「私が「対  
馬丸」に乗っていたら…。私は  
生かされた命なのです」

44年7月、「絶対防衛圏」と  
されたサイパンが  
陥落、この事態を  
受けて南西諸島の  
老幼婦女子を九州  
と台湾に疎開させ



藤原 健 本紙客員編集委員

## 「生かされた命」の決意

ることが決まり、その月に一般  
疎開開始、8月には疎開学童を  
乗せた船舶が那覇港から九州に  
向かった。沖繩戦が始まる直前  
の45年3月までの9カ月間に九  
州に疎開した沖繩県民は約7万  
人。うち、学童疎開は宮崎県に  
3158人、熊本県に2612  
人、大分県に341人の計61  
11人。大仲さんはその1人と  
して、戦争を生き延びた。沖繩本島

に残った親戚のうち、沖繩師範  
学校を卒業したばかりの叔父と  
従軍看護婦だった叔母は戦火の  
中で亡くなっていた。

6年生の時、すべてが灰燼に  
帰っていた故郷・沖繩に帰っ  
た。高校卒業後、父と同じ獣医  
を目指して東京の大学に入学。  
ある日、アフリカで住民のため  
の医療活動に生涯をささげたシ  
ュバイターの著作を読んだ。  
これがきっかけで、大仲さんは  
獣医ではなく医師へと歩みを変

える。

そして、シュバイターのも  
とで活動した経験のある日本人  
医師の話や機会があったこと  
が、大仲さんのその後の医師  
としての生き方を決定づけた。  
医療活動の原点は、「治療即奉  
仕」。沖繩戦で「生かされた  
命」は、医学生時代から西表  
島での医療ボランティア、慶良  
間諸島でのフィリア調査に動  
く。医師になってからも与論島  
での離島医療活動も経験する。

大仲さんの舞台が広がったの  
は88年、国連の専門機関である  
WHO(世界保健機関)の特命  
を受けてインドで1カ月、ポリ  
オの実態を調査してから。これ  
を機に、インドを含むアジアを  
中心に32カ国に支部を置き、国  
際的な医療援助活動を展開して  
いる国連認定NPOのAMDA

(アムダ、旧称・アジア医師連  
絡協議会、本部・岡山市)の創  
設者、菅波茂さん(69)と出会  
い、大仲さんが沖繩支部の代表  
を引き受けることで、沖繩から

の移民が多い中南米にもAMDA  
の医療活動が広がっていく。

沖繩セントラル病院には、ペ  
ルーに移住した沖繩出身の両親  
を持ちペルーで生まれた内科  
医、渡久地宏文さん(68)が在籍  
する。スペイン語とポルトガル  
語に堪能な渡久地さんをスタッ  
フにしたAMDAの中南米での  
これまでの活動国は、地震など  
自然災害での緊急支援として、  
ハイチ、グアテマラ、ニカラガ  
ア。ペルーでは一昨年末まで3年  
間、継続的にエイズウイルス

(HIV)撲滅に向けた保健教  
育支援を続けた。  
AMDAは、「救える命があ  
れば、どこへでも飛んでいく」  
のがモットーだ。こうした活動  
に対し、沖繩県は2004年、  
「沖繩平和賞」に選んだ。「平  
和共存の社会を実現するには、  
民族や宗教の違いを越え、相互  
理解に努める」ことを医療面で  
実践してきたことを評価したか  
らだった。大仲さんの若き日の  
医学への志もこの評価に重なる

ている。

地球規模の視野を持ち合わせ  
る大仲さんだが、那覇市から委  
嘱を受けた「協働大使」として  
地域に密着した医療への目配り  
もおろそかにしていない。例え  
ば、南海トラフ級の地震が沖繩  
近海で起きることを想定しての  
体制づくり。

「普段から、地域の医療関係  
者はもちろん、家屋の復旧に力  
を発揮してもらおう大工さんな  
ど、復旧・復興に関連するあら  
ゆる技術を持った人々を地域  
ごとにリストアップする。そし  
て、『いざ』というときにすぐ  
に活動できるシステムを事前に  
つくっておく。また、看護師、  
保健師さんたちの海外、県外の  
救援活動や救援への意欲を、そ  
の属する病院や行政のトップに  
もっと理解をしてもらうよう、  
普段から働き掛ける。そんな地  
道な活動も必要ではないか」

救援に加えて、自然災害など  
不測の事態にも備える。それが  
「対馬丸」で犠牲になった同年  
代の人たちへの責任であり、  
「生かされた命」の義務でもあ  
ることを大仲さんは強く思う。  
(元毎日新聞大阪本社編集局長)